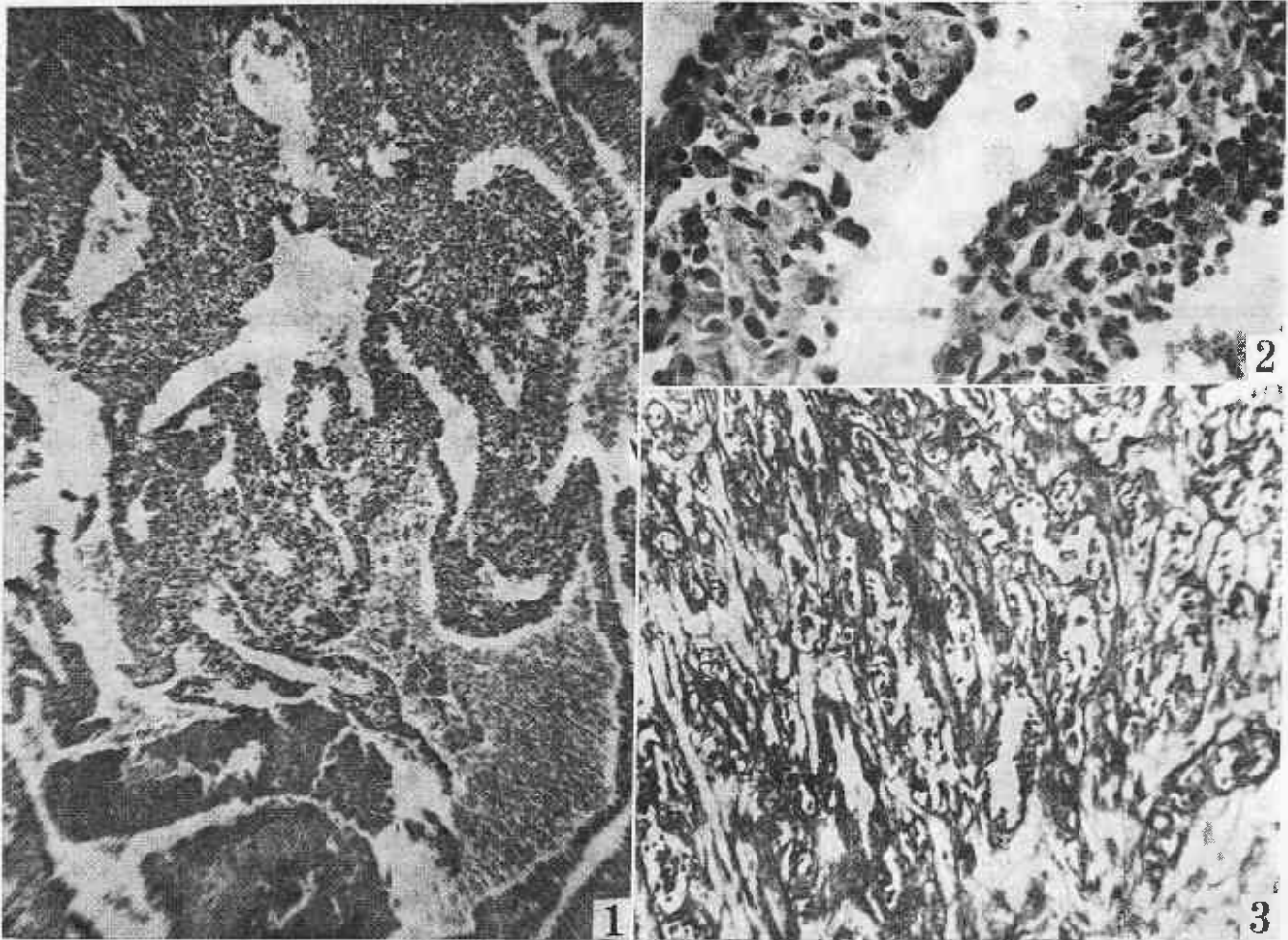


牛の血管内皮腫

鳥取大学農学部家畜病理学教室出題・第6回獣医病理学研修会標本 No. 86



牛，黒毛和種，脾及び肝，と場材料。詳細は不詳であるがと畜検査員の記憶によれば成牛，雌であつたようである。材料はと畜検査時に肝，脾に血塊をいれる血腫様のものがあるのを認め，当教室に肝，脾の一部が持参された。（更に心外膜にも小さな血腫様のものがあつたといわれる。）

肉眼所見：

脾；表面に鳩卵乃至鶏卵大のゆるやかに膨隆する部が認められ，その部は比較的柔軟，断面には米粒大乃至小豆大又はそれらの集合により小鶏卵大に至る血液に富む，腫瘍様の限局巣を認め，周囲には僅かに結合組織の増生を認める所もあつた。これら限局巣と周囲組織との境界は不明瞭である。

肝；限局巣に肝表面に径3～4cmにわたりゆるやかに膨隆する部として認められ，断面においては高度に血液を含有する4～5cm径にわたる血腫様物が目立つた。周囲組織との境界は比較的明瞭，周囲には僅かに結合組織の増生を認めるものもある。その他，断面には更に小さな血腫様，或いは粟粒大乃至小豆大の灰白色の限局巣が見出された。

組織学的所見：

腫瘍組織は種々の形，大きさの管腔を形成し，内張細胞は比較的クロマチンに富み類円形又は紡錘形であるが，異形性を示している。Fig. 1（H. E. 染色×55）は脾における腫瘍組織の一部であるが，これら管腔内には多量の血液をいれるものがあり，血栓の形成も認められ，更に所によつては内皮細胞に覆われた腫瘍組織が乳頭状更に索状に増殖，迂曲し内腔を満たしている。同様な像は肝においても認められる。Fig. 2（脾，H. E. 染色×380）は索状に増殖した腫瘍組織の一部である。Fig. 3（銀染色×136）は肝の血管内に認められた腫瘍組織の鍍銀像であり管腔形成（毛細血管形成）と著明な基底膜が認められる。これら腫瘍は脾においては浸潤性で，腫瘍細胞は脾洞内皮に移行し境界不明瞭であるが肝においては比較的限界明瞭である。更にこれら腫瘍組織の一部においては海綿状血管腫の像を思わせるもの，或いは腫瘍組織は実質性の感を与える所もあつた。

これらの事から本腫瘍は血管系の腫瘍と考えられ，毛細血管形成像および海綿状血管腫の像と並んで腫瘍細胞は索状の増殖を示し，一部には実質性の感を与える所から血管内皮腫 Hämangioendotheliom と考えたい。